九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

老人と家族 : 一つのsymbolic interaction

片多, 順
福岡大学

https://doi.org/10.15017/2231548

出版情報：九州人類学会報. 3, pp.1-3, 1975-10-20. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

老　人　と　家　族

―― 一つの symbolic interaction ――

福岡大学　片　多　　順

九州人類学研究会での私の発表テーマは“老人の文化人類学的研究”と題して，日本における調査の視点として私なりに考えたものをいくつか提示したわけですが，その詳しい内容については，その後別紙（「季刊人類学」，第6巻第1号，１９７５年2月，pp.１１２－１４０）に発表の機会を得ましたので，ここではその後得ました知見の１つである老人と家族の関係，特に，日本のムラの老人たちとムラを離れて都会に住む子どもたちとの関係について考えてみたいと思います。

老人を中心にすえてある社会の親族構造をみていこうとするのが私のメインテーマですが，複雑で多様な親族関係の中から老人だけを取り出して考えることができないように，そこで得た知見はしばしば社会の局面を理解する鍵を提供してくれるものであります。

昭和４９年夏から秋にかけて福岡県精神衛生センターが主体となって福岡県八女郡矢部村において老人の精神衛生に関する調査が行なわれました。矢部村は若年令層の村外への流出にともなういわゆる過疎化現象と人口の老令化が顕著にみられるところであり，この調査はこうした村での６０才以上の１人世帯および２人世帯の人々，７１世帯，１１６人を対象に行なわれました。調査の内容は老人の身体的精神的健康度に中心がおかれましたが，社会関係との関連性をもみるべく，老人と家族との関り，とりわけ，村に住む老人と村を離れて住む子どもたちとがお互いにどういうことでどの程度関り合っているかが設問に加えられました。

その結果，現在村に１人で，あるいは老夫婦２人で住む人たちのほとんどが子どもをもっていること，そしてその子どもたちと何らかの関りをもっていることが分りました。これはあるいは当然のことといえるかもしれません。が，しかしその内容を詳しくみると，そこには地理的にへだてられた親子関係を支えるための日本独自の象徴的交換体系が働いているように思われます。

先ず，老親と子どもたちとの相互作用の具体例として，子の方から親の方に働きかける関係をみてみますと，子どもがいる世帯６２例中，頻度の高い順に，

1. 盆や正月に親元に帰省する。（３０例）
2. ひまをみてはよく訪ねる。（１７例）
3. 親に仕送りをしたり小遣いをあげたりする。（１７例）
4. 手紙や電話（全ての世帯に有線電話がとりつけられている）で近況を伝えたり，親の安否をきづかう。（１５例）
5. ときどき孫をつれてきて親元に泊っていく。（１０例）
6. 田植え，茶つみなど農繁期にきて作業を手伝う。（８例）

その他，親を旅行に連れていく。病気の時にお金をくれる。衣類を買ってくれる。などであった。

次に村に住む親の方から村外にいる子どもの方に働きかける関係としては，

1. お茶や野菜を送ったり，来た時に持たせてやる。（３４例）
2. 孫に小遣いや衣類をやったり，入学・卒業時にお祝いをあげる。（１２例）
3. 娘の出産時や病気の時に手伝いにいく。（９例）

その他，娘の嫁出先と手間替えをする，長男に家を建ててやる，などであった。

このようにみてくると，全体的傾向として特徴的なことは，親子の相互関係において最も高い頻度でみられた次の２点に要約されそうである。

Ⅰ　盆，正月に帰省することによって親とヒザをまじえて接する機会をもとうとすること。

Ⅱ　親は離れて住む子どもたちに，村で出来た，あるいは，自分たちで作ったお茶やお米，野菜，ミカン，柿，栗，しいたけ，筍，漬物などを送ることによって，直接的つながりに代るものとして，せめてもの郷土の味と香りを伝えようとすること。

こうした関係はこの村に限らず，また，都市・農村の老人に関りなく，離れて暮らす日本の親子関係に特徴的なことかもしれません。しかし，お茶や柿，栗など“八女茶”に代表される矢部村の名と味，香りとが矢部村の場合，特に地理的に離れて暮らす親子の関係を心理的，情緒的に近づけ，結びつなぐものとして大きな役割を果しているように思われます。いわば，過疎化，核家族化という避けえなかった現象をのりこえる手段としてこうした交換（相互作用）を通じていつまでも１つの家族としての感情的連帯を保とうとしているのではないでしょうか。

村に住む親から，村を離れて住む子に送られるお茶や野菜は，それ自体のもつ実質的価値よりもずっと大きなシンボリックな価値をもつものといえます。それは親から子への「元気の便り」でもあり，子のもつ郷土愛やふるさと意識をより強固にするものでもありましょう。親から子に送られるこうした品々が端的にかつ強固に親子の距離を近づけ，現在地と村との隔りを埋めるものとして機能しており，それは諸物価の高騰，交通事情の悪化などで今後ますます難かしくなるであろう盆，正月の村への帰省にとって代って村の老人と離村した子どもたちなどその家族を結びつけるものとしてより大きな機能を果していくものと思えます。

ここで強調した親子関係は必ずしも互酬的なものではないし，必ずしも等価交換を原則にしたものでもありません。また，育ててくれた親に対する日本的「恩」の考え方からいえば，子から親に働きかけるのがタテマエでもありましようが，それだけによりシンボリックな関係であり，日本の親子関係，現代の老人がおかれている立場をシンボライズするものがここにあるような気がします。

老いた親とその子どもたちとの日常的な相互作用は結婚後も親と同居するという伝統のないアメリカなど西欧社会の方が多いといわれています。こうしたことをふまえて現在，老人を中心とした都市と農村，および他の文化との比較調査を計画中ですので，いずれより深い詳細な報告をさしていただきたいと考えています。

最後に，調査票作成の段階から調査への介入を快よく受け入れて下さった福岡県精神衛生センターの

方々（伊藤篤所長，および小松原百合子，鮫島文孝，坂口宏子，渡辺良子の諸兄姉），ならびに矢部村役場の皆様に厚く御礼申し上げます。